土木屋の読書と旅（18）

令和 4 年 11 月

『てふてふが一匹韃靼海峡を渡っていった』　安西冬衛の有名な一行詩である。

中学の国語教師 N 先生から教わった記憶のあるノスタルジックで、そして広大な気持ちにもなれる「t」音が連続する不思議な詩である。「てふてふ」が「蝶々」、「韃靼」がモンゴル高原の東北で遊牧した小部族の総称、「韃靼海峡」が「間宮海峡」であると分かっていても凡人である私にはほんわかとした韻律の気持ち良さしか残らない。

“てふてふ”の詩ついては次のような考察もある。

『畳まれる風景と滞る眼差し：エリス俊子：立命館言語文化研究 22 第 4 号』より一部要約抜粋

- この一行詩と同じ題の詩は、はじめ新興植民都市大連で刊行された詩雑誌『亜』第 19 号(1926 年 5 月)に掲載された。

  てふてふが一匹間宮海峡を渡っていった。　軍艦北門の砲塔にて

- 1927 年末の『亜』終刊のあと、安西は北川冬彦、三好達治とともに翌年の『詩と詩論』創刊に加わり、……このころより安西の詩は大きく趣向を転じて……安西の詩空間には「大連」ならぬ「満州」全域、さらには蒙古、新疆、中央亜細亜へと広がる数々の土地の名が散りばめられるようになる。「地図」の創造力を通して安西の亜細亜幻想が広がり、それが徐々に同時代の大亜細亜主義の言説に接続していった。

＊　＊　＊

地図を片手に本を読む。旅行記・紀行文でも、エッセイ・小説でも、歴史・経済の本でも地理的把握によってその理解が深まる本であれば、どんなジャンルの本でも地図を傍らに置き読書を楽しむのも秋の夜長の楽しみの一つである。極端な例であるが、最近流行りの地政学（geopolitics：地理的な条件に注目して、軍事や外交といった国家戦略、また国同士の関係などを分析・考察する学問）の本は英語名から分かるように地理的把握なしには理解ができない。つまり、連日放送されるロシア・ウクライナの報道番組は、基礎資料として的確な地図表現を伴わなければ議論の直感的な把握ができないことになる。何はともあれ気楽に地図を片手に好みの本を読んでみたいと思う。

＊　＊　＊

『ロシアにおけるニタリノフの便座について』椎名誠/新潮社

椎名誠をご存知の方にはお馴染みの“シーナ節による旅行記”であり、テレビ局の仕事でシベリアに行った時の思索的冒険譚でもある。まず“ニタリノフ”とは誰か。取材は 11 人のチームだったが、長い旅なので退屈しのぎにいつの間にかメンバーのそれぞれに即席のロシア名がつけられた。椎名誠はラーメン好きで居眠りをすぐすることから“アレキサンドル・シナメンスキー・ネルネンコ”、TBS 技術クルーのチーフはいつもニコニコしているので苗字(新田)とかけあわされて“ニタリノフ”になる。彼は街で出会う大ざっぱでいいかげんで中途半端なロシアの電化製品や水道の栓、バスタブなどをたちまちのうちに修理してしまう優れ者。

これはシベリア第二の都市、ヤクーツクのホテルに泊まったときの話である。おかしなことにこのホテルのトイレには便座がなかった。前提知識としてロシアのホテルの便所、便器は相当に迫力に満ちで

土木屋の読書と旅（18）

令和 4 年 11 月

汚いこと。あまりにキレイさっぱり便座がないので、もしかするとこのヤクーツクという土地では便座というものをもともと使わない習慣かもしれないと喧々諤々の民俗学的議論となる。ここで技術屋ニタニノフが青い発泡スチロールでつくったのが“ニタリノフの便座”という話である。判別しがたいが表紙カバー写真のニッタリ笑っているのがニタリノフ氏、この本は取り上げた話題への読者の好悪が分れる本でもある。

＊　＊　＊

『ロシア点描　まちかどから見るプーチン帝国の素描』小泉悠/PHP

著者の小泉悠氏は最近“ロシアのウクライナ侵攻”関連のテレビ番組によく出演するロシアの軍事安全保障政策の専門家で東京大学先端科学技術研究センター専任講師。

彼はこの本のまえがきで次のように述べている。

『…本書では(軍事研究とは)すこし違うアプローチをとってみました。ロシア人とはいかなる人々で、ロシアではどんな生活が営まれているのかを、なるべく身近で分かりやすく理解してもらおうということです。…ロシアがどんな国であるのかを理解することなくしては、この戦争を止め、二度と繰り返させないようにできないのではないでしょうか。…我々が今、なぜこのような悲劇を目の当たりにしているのかを理解するための補助線になれば良い、というのが本書にかけた願いです』

二三内容を紹介すると、「第 1 章ロシアに暮らす人々編」では

『ロシア人は見知らぬ人をとにかく警戒します。とにかく身内以外の人を信用しないのです。日本人はよく他人の赤ちゃんを見かけると「あらかわいい」なんて覗き込んだりしますが、ロシア人に対してやると思いっきり嫌がられます。　ただ面白いのは「ロシア人は特にロシア人を信用しない」というところです。…そのかわり一度身内扱いになるとどこまでも親切にしてくれたりもします。…これはロシア人の気質の良さでもあるのでしょうし、厳しい気候や専制的な政治体制の下では助け合わないと生きていけなかった、という歴史の反映でもあるのでしょう。…ところで身内に対して無限によくしてくれるということは、身内扱いされたら最後、こちらも無限によくしてあげないといけない、ということを意味しています』

「第 2 章ロシア人の住まい編」では

『作家の椎名誠さんといえば「ロシアにおけるニタリノフの便座について』というエッセイ集で知られています。その表題作ともなっているのが崩壊直前のソ連旅行記で、いろいろと味わい深いエピソードが満載なのですが、とくに有名なのは「ソ連のトイレにはなぜか便座がない」という話です。トイレの便座が取れてしまっている場合が非常に多く用を足すのに苦労する、という体験談がユーモラスに綴られています。これは誇張ではなく、たしかにロシアのトイレには便座がないという場合が少なくありません。新しいカフェやショッピングセンターにはきちんと便座のついたきれいなトイレがあるのですが、大学とか科学アカデミーとか、「ソ連ぽい」場所に行くと今でも便座がなかったり、凄まじく汚いトイレに遭遇したりします』

『…フルシチョフは一家それぞれにリビング、キッチン、風呂、トイレなどを備えた近代的な団地建設に乗り出すわけですが、1960 年代に入ると技術革新が起き…団地を大量建造する工法が発明され…これがいわゆる「K-7 型フルシチョカ」です。…ちなみにウクライナでの戦争のニュースを見ていると、

土木屋の読書と旅（18）

令和４年 11 月

まさにロシアにあるのとまったく同じフルシチョフカが破壊され、黒焦げになっている…歴史や文化を共有するだけでなく、こうして住まいの形までそっくり同じウクライナに対して、なぜロシア軍がロケット弾を撃ち込まなければならないのでしょうか。』

この本はさらに、第３章魅惑の地下空間編、第４章変貌する街並み編、第５章食生活編、第６章「大国」ロシアと国際関係編、第７章権力編とつづく。全 185 ページのうち政治的な話題を取り扱っている６章、７章は 37 ページ(20%)と少なく、通常の旅行雑誌では物足りない人の格好の旅ガイドブックになっているのではないだろうか。

『モスクワはときに「大きな田舎」といわれ、大都市だけれどもどこかガサツなイメージを持たれています。首都であり、人口も最も多いので、生き馬の目を抜くような、どこか殺伐としたところがあるのです。一方、サンクトペテルブルクは古くからロシア帝国の中心地で、洗練されたムードが漂っています。街並みも違うし、住民の意識も違います。そんな違いが警察官にも表れているのでしょう。ちなみにモスクワの地下鉄は扉がギロチンのように「バシーン！」と閉まるので、初めて乗った人などはおびえてしまいますが、サンクトペテルブルクでは日本と同様、「プシュ」とゆっくり締まります。この地下鉄の閉まり方には両都市の気質の違いがよく表れているということもよくいわれます』などの記述はロシアで暮らした経験からの“空気感”やコメントであり、ロシアを理解するための良い補助線になっていると思う。

＊　＊　＊

『夕暮れに夜明けの歌を～文学を探しにロシアに行く』奈倉有里/イースト・プレス

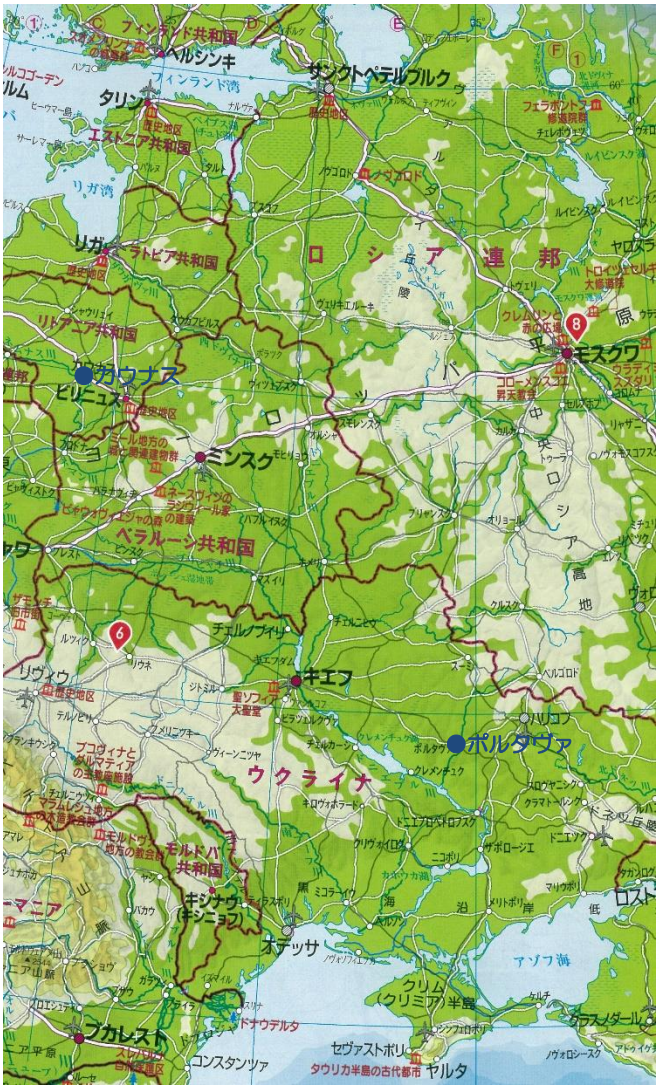
著者のプロフィールは、2002 年からペテルスブルグの語学学校でロシア語を学び、その後モスクワに移住、モスクワ大学予備科を経て、ロシア国立ゴーリキー文学大学に入学。2008 年に日本人として初めて卒業し、「文学従事者」という学士資格を取得。東京大学大学院を経て博士（文学）。研究分野はロシア詩、現代ロシア文学。ロシア文学の批評、翻訳家でもある。

この本は私には留学体験記というより、一種のビルドゥングスロマン（教養小説）のように思えた。

本題とは関係のない都市計画上の話であるが、サンクトペテルブルグ市街地の地図を見るとモスクワ駅、フィンランド駅という主要な駅がある。これは最終の目的地を示す命名と思われるが、モスクワ市街地図においても同じようにキエフ駅、ベラーシ駅という駅がある。日本では“ターミナル”は異なる交通機関同士の結節点として使われる場合が多いが、本来の意味でのターミナル（終末・端末型）駅は欧米に多く、日本でも鉄道網形成初期には東京駅や上野駅もターミナル駅であったと思われるが、現在では都市構造上少ない形式となっている。ヨーロッパの映画には哀愁を

土木屋の読書と旅（18）

令和 4 年 11 月



漂わせるターミナル駅がよく効果的な背景として使われる(映画ひまわりのミラノ中央駅など)。

出版社がつけた帯の惹句は『ロシアとウクライナの魅力的な人たちーこれを読めば、ニュースの向こうにいる生身の人、その人が大切にしているものが実感を持って伝わってくる。』　多少強引なコメントにも思えるが次のような章もある。

『27 言葉と断絶　人と人を分断するような言葉には注意しなさい。―レフ・トルストイ

（作家：ミハイル・シーシキンの現状批判として紹介）　ロシアとウクライナは、本当の意味での兄弟だ。私自身、母はウクライナ人、父はロシア人の家に生まれているし、似たような家庭はロシアにもウクライナにも数限りなく存在する。その二国を争わせ、分かつことなど、本来できるはずがない。ゴーゴリを～ともに誇る偉大な作家を、どちらかの国に属する作家と定めるのだろうか。ともに経験してきた恐ろしい歴史を～恥を、苦しみを、分断するというのだろうか。……いかなるイデオロギーのもとにおいても～十九世紀の正教であれ、共産主義であれ、現代に復活した正教であれ、体制は常に愛国心を利用して国民を操ってきた。それは今でも変わらない。この数週間というもの、ロシアのテレビではひっきりなしに、「祖国を守れ」と訴えている。「クリミア及びウクライナ東部のロシア系住民を、ウクライナの暴徒から守れ」と……』

この本の内容には関連はないが参考までに、右上の地図にウクライナのポルタヴァ(映画ひまわり冒頭と最終の有名なシーンが撮影された場所)とリトアニアのカウナス(杉原千畝が 6000 人の命のヴィザを発行した領事館のあった場所)の位置を示した。東ヨーロッパの国境は変化し続けている。

映画「ひまわり」のオープニングシーン

＊　＊　＊

10 月 27 日から秋の読書週間が始まった。読売新聞の関連記事を紹介したい。『……本を買う場所も最多は「書店」70%で 2 位の「オンライン書店（アマゾンなど）」26%を大きく上回った(10/27)』『電子書籍の経験のある小中高生は紙のほうが読みやすいと感じる傾向にあることが、全国学校図書館協議会の学校同署調査でわかった。紙の本が選ばれる理由について、…「物語や小説など、しっかりと内容を追う必要がある読書には、紙の本が適しているためだ」（10/28)』『東京古書組合が以前募集した俳句の入賞作　＜立ち読みで帰るか檸檬置くべきか＞（砂山惠子）(10/27 編集手帳)』

すこしホットした気持ちになった秋である。

古谷　健